

2015
秀作

第13回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール



圧迫される学び

東京都・東洋女子高等学校 3年 大谷 秋音

国立大学の理系化を国が推奨している。社会へ出て即戦力になる人材、産業創出などの目に見えて社会貢献ができる人材を育てていきたいのだ。

国立大学に交付される運営費交付金は減少傾向にあり、「国には、限られた予算を理系を中心とする優れた教育研究に集中させたいとの思惑がある」^{注)}という。

世界的に見てもその傾向は強くアメリカのオバマ政権も科学教育分野への補助金を増やしている。

そこで考えたいのは、学びとは何か、である。上の話は捉え方によってはお金になるから理系になれと言われていたようである。それでいいのだろうか。

私は文系、文学部志望である。小学生の頃に読んだ小説に感銘を受け、大きくなったら必ず文学を学ぼうと決めていた。しかし友人に文学部を受けたいのだと言った時、「文学部ってどこに就職するんだろうね。」と言われた。私の頭の中はハテナでいっぱいになる。シュウシヨク？

ある授業では先生が「理系の方が就職率いいし、給料もいいからね。」と、言っていた。キュウリョウ？

堂々と、いい大学を出ればいい職に就けると言っている大人がこの世には沢山いる。

私は混乱した。大学と就職はイコールになっている！確かに就職はする。しかしそれは学んだ結果ではないのか。就職するために大学へ行くのか。

その傾向をありありと見せつけてくるのがお金である。先に述べたように、理系にお金を使いたいのだ。即戦力として稼いでほしいのだ。そして人々は良い給料の下日々の生活を送りたいのだ。そう、私たちは学びをお金に変えている。お金のために学んでいる。

学問の自由という言葉は御存知だろう。何を学ぶか、何を研究するかは自由なのだ。国の財政、思惑によってルールを決められるべきではないのだ。

しかしながら、まあお金は強い。お金がなければそれこそ進学できない。学問の自由以前の問題である。

お金がない人にも学びを与えたい。学びがお金上の問題から圧迫を受けるといえるのはいかがなものか。

私の通う高校は、都内私立で一番学費が安い。その上特待生制度を設けており優秀ならば3年間学費が無料ということもあり得る。これも1つのお金の問題から解放された学びの形だと思う。^{がんば}頑張ればそれだけ勉強環境が向上する。

私立高校では基本的にどの学校でも特待生制度を設けたり学費を支援したりしており、より多くの学ぶ者を生み出している。

更に言うならば、厳しい審査はあるが奨学金制度もその1つだ。

そう考えていくと、「なんだ、日本は学びたい人たちに寛容ではないか。」と思う。私も思う。しかし今進行中の理系化推奨、これはどうだろう。しかもこれは財政上という問題があることを忘れてはいけない。

仮に、今述べた私の高校や他の私立、奨学金すらも理系中心になったとしたら。自分に近づけて考えるのだ。いくつかの選択肢の中で1つだけが優遇されたら。しかもそれがお金の面で。お金が出てくることによって私たちは否応にも優劣を感じる。私たちを支配するのは数字なのだろうか。

今後どうすれば良いのだろうか。つまり、お金によって左右される学びの自由、という状況をなくすということだ。

お金に換算されない「学び」を楽しむ余裕を身につけること。これがまず大事ではないか。イギリスでは文学などの教養に重きを置いているし、フランスでは2011年に文系芸術系の授業時間が増やされている。「将来お金にならないものを……。」と苦い顔をする人も多くいるだろう。しかし教養なのだ。教養はお金を稼がない。しかし持っていなくてはいけないものだ。お金を稼ぐためではなく、教養をつけるために学ぶ。これを、私たちは大事にしていくべきではなからうか。

次に、学びに国が介入している点だ。国が財政上の問題で大学に介入しあまつさえ理系を推奨する。大学の自治という言葉などもはやなかったことにしているかのように。確かに、国が運営しているから、ということもあるだろう。しかし、政治上——この場合財政の干渉を受ける道理はないはずだ。

お金は威圧する。私たち若者の未来ある学びを。理系だから、即戦力だから、お金を出す。学ぶ者として問いたい。理系でなければ、稼げなければ学ぶ意味はないのか。

お金によって、学べなかったり文系の肩身が狭くなったり、今の私たちは良いお金のために生活しているようだ。そうではなく良い学びのためにお金を使ってほしい。

(注) 読売新聞 2015年7月12日 「国立大 文系再編の波」

